

シノドスへの歩み みことばと共に 待降節第二主日C年

小西広志

2021年12月5日

はじめに

東京教区の皆さん、こんにちは。教区シノドス担当者の小西広志神父です。今日は2021年12月05日は待降節第二主日です。今日の朗読の箇所をシノドスの教会のあり方と関連づけながら読んで、味わっていきましょう。

神の姿

今日の第一朗読の箇所はエルサレムへのなぐさめを歌う長い詩から採られています。バビロンに捕囚された民に向かって、慰めと希望を与える箇所です。こうして故郷であるエルサレムへの帰還が準備されます。

今日の第一朗読をていねいに読んでみると、いくつかの言葉が神さまの姿を表していることに気がつかれます。2節には「頭に永遠なる者の栄光の冠をつけよ」とありますから神さまは「永遠なる者」です。7節では、「すべての高い山、果てしなく続く丘は低くなれ、谷は埋まって平地になれ、と神は命じられた」と記されていますので、神さまは「命じられ」る方なのです。そして「神は自らの慈しみと義をもって栄光の輝きを表し、喜びのうちにイスラエルを導かれる」と9節で言われるように、神さまは「導かれる」方なのです。永遠なる方は、人々がエルサレムへと戻ってくるために谷を埋め、山を低くするように命じます。こうして人々はエルサレムへと導かれます。その時、悲しみと不幸は失われ、喜びに満ちるのです。

見分けられるように

「第二朗読に移りましょう。今日の第二朗読はパウロの祈りの言葉に満ちています。それはパウロ自身のフィリピの教会の人々への愛の想いを表しています。11節にある「たたえることができるように」という祈りは、現代のわたしたちに向けられた祈りではないでしょうか？

ところで10節の「見分けられるように」に注目してみましょう。ギリシア語の原文はドキマゾーと言うそうです。もともとは「金や銀が本物かどうかを試す」の意味だったそうです。そこから「試す、吟味する」という意味が生じました。そして、さらに発展して「本物として受け入れる、承認する」という意味が生まれていったそうです。この箇所のフランシスコ会訳を見てみると「大切なことを識別できるようになりますように」となっています。

東京教区の雨宮師の解説によれば、今日の朗読箇所では「吟味し、識別する」と「認め、受け入れ、承認す

る」の二つの意味が響いているそうです。なぜなら、本当に重要なものを識別して、それを受け入れることが求められているからです。そうでなければ「純粹で、非難されるところのない者」（同フランシスコ会訳）とはならないからです。

主の道

第一朗読にあるように、徒歩で連れて行かれた捕囚の民を神は道を整えて連れ戻してくださいました（第一朗読参照）。同じように、第二朗読の言葉、「キリストの日」（第二朗読参照）に備えて、ヨハネによって道がまっすぐにされます。こうしてすべての人が「神の救いを仰ぎ見る」のです（福音朗読参照）。

『ルカによる福音書』が描く洗礼者ヨハネの姿は少し独特かもしれません。他の共観福音書はユダヤやエルサレムから人々が荒れ野にいたヨハネのもとにやってきた記されています（マコ1章5節、マタ3章5節参照）。『ルカによる福音書』が描写するヨハネの活動は、荒れ野からヨルダン川流域でおこなったとありますから、巡回説教者のようです。ヨハネの召命の場所を荒れ野と設定し、宣教活動の場所をヨルダン川流域として区別しています。そしてイエスさまの宣教活動にはヨルダン川流域が記されていませんし、ヨハネに関わる箇所ではエルサレムやガリラヤは削除されています。イエスさまの宣教とヨハネの宣教の対比を際立たせようとの意図があったのかもしれません。

しかも、他の共観福音書がヨハネを洗礼者と紹介しているのに対して（マコ1章4節、マタ3章1節参照）、ここでは洗礼者とは記されていません（7章33節は例外か？）。奇抜な服装にも触れていませんし（マコ1章15節参照）、人々の罪の告白と洗礼についても記されていません（マコ1章5～6節、マタ3章4～6節参照）。『ルカによる福音書』が描く洗礼者ヨハネとはどんな人物だったのでしょうか。

福音朗読の後半は『イザヤ書』40章3～5節からの引用です。もちろん、これは捕囚の地からの帰還を預言する箇所です。フランシスコ会訳で朗読します。

呼びかける者の声がする。「荒れ地に主の道を備えよ。荒れ地にわたしたちの神のための街道をまっすぐにせよ。すべての谷は高くされ、すべての山と丘は低くされ、起伏は平坦に、険しい所は平野とされるように。主の栄光が現れ、すべての肉なる者はともにこれを見る。まことに、主の口が語られた（イザ40章3～5節フランシスコ会訳）。

福音朗読の箇所は、ほぼ『イザヤ書』から引用ですが、「人は皆、神の救いを仰ぎ見る」（3章6節新共同訳、フランシスコ会訳は「すべての人が神の救いを見る」）だけは福音書の作者による付け加えとなります。すべての人が神の救いを見るは、シメオンの賛歌の後半部分と関連づけられているのかもしれません（2章31～32節参照）。『ルカによる福音書』が伝えたい洗礼者ヨハネとは、「呼びかける声」であり、「主の道を備える」者ではないかなと思います。

わたしは長い間、「主の道を備えよ」の「主の道」を出かけて行く道と考えていました。しかし、今日の三つの朗読を読むと「主の道」とは戻る道、帰還の道です。わたしたちも戻っていくのです。

まとめ

待降節が好きなのは、小教区なり、修道院なり信仰の共同体が一步步馬小屋に横たわるイエスさまに近づいていくというイメージがある点です。どの聖堂でも4本のローソクが飾られ、毎週一本ずつ点火されていきます。少しずつクリスマスへと近づいていくのが分かります。わたしの住んでいる修道院では毎日夕食後にラ

テン語の聖歌 Rorate coeli desuper を歌います。毎週、少しずつメロディが変わっていくのがとても面白いです。Rorate coeli desuper は待降節の入祭の歌「天よ露をしたたらせ」のもととなる歌ですね。うちの教会の子どもたちは「天よ露をしたたらせ」を「天つゆ」と呼んで面白がっていました。かわいらしいです。

わたしたちが帰っていく先は、幼子イエスさまのもとです。それは具体的には、幼子イエスさまと共にある教会です。今年の降誕祭、コロナ禍ですが、多くの人々が幼子イエスさまのもとに帰ってこれますように。

それでは、また来週。